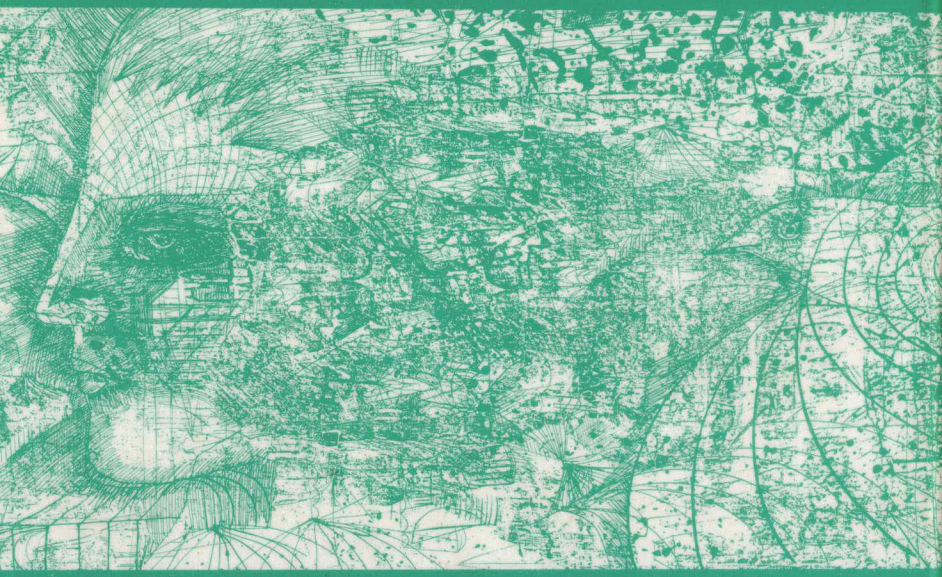
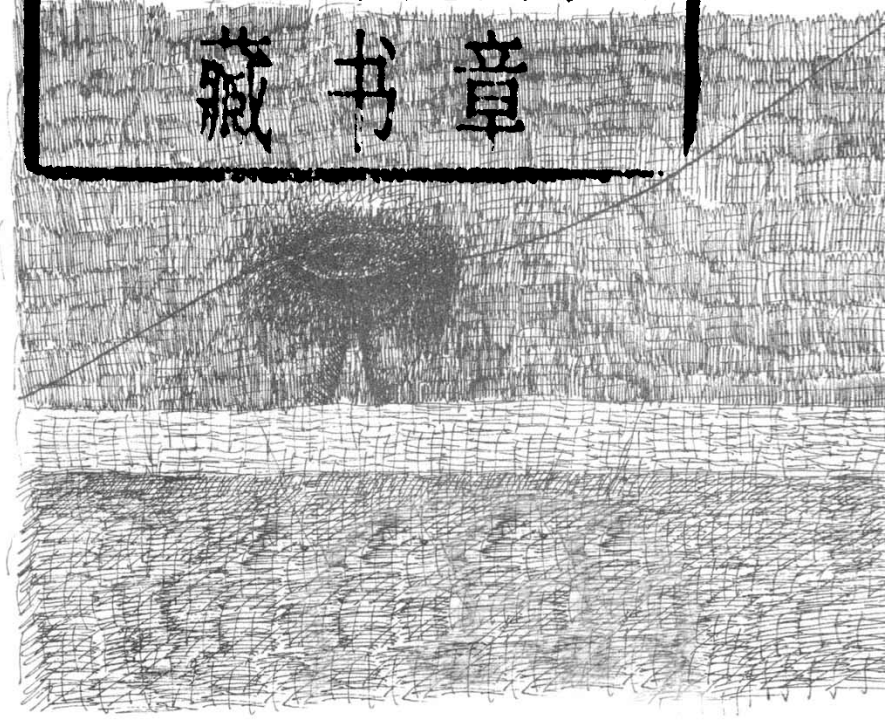
大江健三郎

僕が本当に若かった頃



僕が本当に若かった頃

江苏工业学院图书馆
藏书章



大江健三郎

講談社

僕が本当に若かった頃

一九九二年五月二五日　第一刷発行

著者——大江健三郎

© Kenzaburō Ōe 1992, Printed in Japan

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—一二—二一　郵便番号一一二—〇一

電話　出版部（〇三）五三九五—三五〇四

販売部（〇三）五三九五—三六二二

製作部（〇三）五三九五—三六一五

印刷所——株式会社精興社　製本所——株式会社黒岩大光堂

定価——一五〇〇円（本体一四五六円）

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

ISBN 4-06-205875-8　（文1）

目次

火をめぐらす鳥　5
「涙を流す人」の楡　23
宇宙大の「雨の木（レイン・ツリー）」　43
夢の師匠　85
治療塔　121
ベラックワの十年　149
マルゴ公妃のかくしつきスカート　169
僕が本当に若かった頃　197
茱萸（ぐみ）の木の教え・序　261

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

僕が本当に若かった頃

裝幀　司　修

火をめぐらす鳥

（私の魂）といふことは言へない
その証拠を私は君に語らう

右の一節は、若い時のめぐり合い以来、つねに透明な意味をあらわしてきたというのではないが、僕にとって大切なものだ。しかも最近、それとの関係に新しい光がさしてくる体験があったので、ひとつ短かい物語を書くことにした。詩の書き手は、声高に語るという人柄ではなかったようだ。作品にもそれはうかがわれる。詩人の死後、おなじく好ましい寡黙さで、遺された作品を註釈し・編纂する研究者たちがあることも知っていた。しかしこの国の風土の中でしばしば異様な共鳴音をたててひずむロマンティシズムの声調で作者を追懐する論者も数多かったから、僕はこの詩への思いを人に語ることはなかった。

もともと僕はこの詩といかにも若いうちに出会い、一挙にそれを理解したと信じてしまった。

そこで、詩人の研究書に眼をくばる能力も余裕もないまま、むしろ権威のある解釈など意識的に避けてとおるようであったのだ――すくなくとも、ある時期までは――。そのうち、この詩への思いこみはなまなかなことでは作りかえぬ堅固さにかたまってしまった。現在の僕は、若いうちに詩の読み方を良い師について「まなび」、身体の感覚のなかで「おぼえ」、さらには魂において「さとる」、柳田國男流の教育システムが望ましいと考えているけれど……

まず僕が幼いような徒手空拳で出会い、深い印象を受けたままにこの詩のことを語っておくなら、最初の二行につづけて詩人は――まだ二十代であったはずだが（一老人の詩）としてこの詩を書いており、それも少年であった僕が妙に惹きつけられる理由だったという気がする――その幼時の思い出を語るのだ。

深い山のへりにある友達の家に遊びに行くと、いつもかれは山ふところに向かって口笛を吹き、鶯を呼びよせた。そしてその歌を聞かせてくれた。やがて友達は市（まち）の医学校に行ってしまう。ふたりとも半白の頭髪をいただくようになって、町医者となった友達と再会したが、この話をすると、かれは特別にはそれを思い出さないと言う。

しかも（私の魂）は記憶する
そして私さへ信じない一篇の詩が
私の唇にのぼつて来る
私はそれを君の老年のために

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

書きとめた

このようにして成立したとされる詩を、まだ少年の僕が読んで、それまで印刷されたものをつうじて経験をしたことのない激しさの感情をあじわったのである。身体の芯に火の玉があり、その熱でシュッシュッと湯気がたつような涙が噴出するのに茫然としながら……

まったく、こうしたことはある、と僕は感じ入っていたのだ。その時、僕はやはり山のへりの生家に、新制高校三年の夏休でかえってきたところ。この年の七月、創元社の選書で出た詩集をなんらかの本能にみちびかれてすぐさま買っていたことが、いま詩人の年譜を見てわかる。狭い川をへだてる栗の林には時鳥(ほとときす)や郭公が啼き、それは直接この前の帰郷の際の鶯の声を思い出させた。こちらも鶯を呼ぶことにたくみで、それのみならず僕にこの谷間の植生に始まり宇宙のなりたちにいたるまで、それこそ森羅万象の指南をしてくれた友達は村を去っていた。僕の方も市(まち)に出ていながら、しかしかれが去ったことを不当に感じていた。やがて自分らは再会するにちがいないが、たがいに半白の頭をかかげながら話すうち、友達は僕に教えてくれた最上のことは忘れていることを認めるだろう、特別にはそれを思ひ出せないと、微笑しながらであれ……　その時、僕はなお、しかし(私の魂)は記憶する、と静かな確信をこめていいかえしうるだろうか？　(私の魂)といふことは言へない、とも……

僕はこの詩を、文字使いのいちいちまで正確に諳んじることになった。幼時には正字で覚えていた漢字を、新しい教室の習慣のまま、ためらわないで当用漢字に置きかえてしまっていたにも

かかわらず、僕には詩人の用いる文字と仮名づかいがいちいち動かしがたく感じられたのである。なぜならそれはそのように、自分の老年のために書きとめられたものであるから……

鶯という字。あらためて僕は父親が死のまぎわまで枕許に置いていた辞書で引いてみた。この詩を受験勉強の数学の計算用に使っていた藁半紙に書きうつして眺めるうち、いかにも神秘的な文字に思えてきたから。しかし辞書には、小鳥の名、うぐいす、とのみ書かれていた。僕は失望したが、思いついて別の字を引いてみることにした。そして着想は正解であったのだ。この時から、僕にとって辞書が特別な意味を持ち始めたという気さえする。

螢。形成「𤇾」(＝火をめぐらす)＋「虫」。光を放って飛びまわる虫の意。それならば鶯は、火をめぐらすように、光を放つように、歌いながら飛びまわる鳥ではないか。さきの春、栗林と川にはさまれた藪に鳴きみちていた鶯がまさにそうだった……

僕はこの漢字のかたちと音とについての、幾千年前の、それも外国人による説明を、いま現にこの一瞬の過ぎ去る現象として自分の耳によみがえる鶯の声をとおして納得していた。かつてはすぐにも夕暮が来て川岸にあふれるはずの螢のイメージを媒介に、さらに一段上の秘密を教えられているようにも感じたのである。教えられていることの内容を、まだ自分の言葉にすることはできない。しかしそれは、ほかならぬいま、自分が書きうつしている詩につながっているはずのものだ……

(私の魂)といふことは言へない

しかも（私の魂）は記憶する

十八歳の僕が感じとっていたことを、いま老年に進みよって自分の言葉で書きとめるとすると、それはこういうことになるだろう。個を越えた、そして個を含みこむ（私の魂）の光の群がりに向けて、一匹の螢として自分も光りながら飛んでゆく。そのために自分のこれからの生がある。そうしたことはもうずっと以前から（私の魂）につながる自分が知っていたことだし、それ以上のことは（私の魂）の外に個としてあるかぎり、いつまでも知ることができない……

それから十年目に生まれた僕の長男には、頭蓋のディフェクトにもとづく障害があった。生後六年間、親の僕たちに言葉を介してはコミュニケイションの関係を開くことのなかった息子が、初めて積極的に、自発する言葉をかけてきたのは、鳥の声を介してであった。生後しばらくたって、つねに沈黙しているにもかかわらず聴覚に敏感なところがあって、ラジオやテレヴィの効果音としての野鳥の声がすると、微細な、しかし新鮮な反応を示すのに気がついた僕と妻は、野鳥の声のテープを息子の子守歌がわりにしていた。その頃東京に滞在してつきあいのあった外国の詩人が、この頃になって記憶にいくらかの混乱が生じたまま、――林の傍にあって、いつも鳥の声が響いたあなたの家が懐かしい、とクリスマス・カードに書いて来たこともある。

野鳥の声のテープは、NHKの技術班が録音・製作したもので、ひとつひとつの啼き声の後に、若い女性アナウンサーが、いかにもニュートラルな声音で鳥の名を告げていた。それもあわせ聞

いていたわけだ。そのようにして二、三年の月日がたち、あいかわらず黙っている息子を連れて、群馬県北軽井沢の山荘に出かけた。妻が屋内を掃除している間、息子を肩車して、夏のはじめの高原の、夕暮が静かに濃くなるダケカンバの林に立っていた。近くに戦前法政大学の学者たちが作った組合が湿地から流れ出る小川を塞きとめた湖がある。由緒ある古い別荘地の端に、僕らも山荘を建てさせてもらっている。

その人造湖でしきりにクイナが啼く、僕がそう思った時、一瞬たって頭の上の息子が澄みわたった声を発したのだ。

――クイナ、ですよ。

その日から、僕と妻は野鳥の声のテープをかけてはアナウンサーがその名を口にする前に一時停止のボタンを押し、息子に答えさせるゲームを行なうことになった。また直接に野鳥の声を聞ける場所に出かけて、息子があれこれの鳥の名を告げるのを楽しむこともした。とくに感興をそそられてというのではないようだが、耳を澄ませてよく考えてのその上で、ということは感じられる声音で、――シジュウカラ、ですよ、ヒガラ、ですよ、サンコウチョウ、ですよ、と告げ知らせる……

たいていの野鳥の声をおなじものに聞いてしまう僕は、息子が口をひらく前に、あ、鶯だ、と気がつくような時は嬉しく、はずみたつ気持を押さえて、――ウグイス、ですよ、という息子の声に和したものだ。

そのような時、僕は自分が二十歳前にあの詩に強く惹かれ、鶯の正字を辞書で引いた時のこと

を思い出すのがつねだった。さらには少年の頃、例の友達があの詩の通りに、どうしても僕には真似られぬ口笛で――酷薄なほど鋭いかたちのかれの脣自体に、音色の秘密があると感じられた――誘いだした鶯を思ったのである。

そして僕は、詩人とかれの友達のともに少年の面影の脇に、僕と自分の友達と息子とが――われわれも少年である以上、息子との共存は不合理だが――、重ねたセルロイドの絵のように一緒に坐っている情景を、つまりそのような仕上げでくっきりと見た。

（私の魂）といふことは言へない、という一行の意味が、自分の心と身体のうちに生きていることを確かめたのだ。しかも、その時すでに亡くなっていた友達の魂が、鶯の声のように山や野のいたるところで光を発している。自分の魂は息子の魂とピッタリ一致して、それに照応する、それがしかも（私の魂）は記憶する、ということだ……

さらにもうひとつ。不幸な事故死をとげた友達とは、青年時を過ぎてからも様ざまに心理的な行き違いがあったのだし、息子はあきらかに僕とは別の人格として生きているのだから、たとえいまひとつの記憶に結ばれていても、友達と息子と僕の三者の内面をつなぎ、外側からスッポリ覆い込みもする、この懐かしいものを（私の魂）といふことは言へない。そこに僕も孤独な魂として参入しているのだ。

息子が小学校の特殊学級に入り、いまとなってはむしろ不思議な気がするが、まだ癲癇の発作がなく動作も機敏であったので、一年もたつとひとりで登下校するようになった。午前と午後、

いくらか暇な時間ができた妻は、家の前後の空地に雑木と呼ぶのがふさわしいような小灌木を数だけは多く植えた。それが台地のきわの疎林から隣家まで続いていた緑の通路につながって、庭に野鳥が来はじめたのである。メジロ、シジュウカラ、ヒヨドリ、とくにヒヨドリはしばしばあらわれた。ほかの小鳥たちにくらべてがさつなところのあるオナガも来た。春さきからは、まだ柔らかに鈍色の若芽が出たのみの柘榴の枝に縛りつけた獣脂がめあてで、鶯もあらわれるようになった。

ところがついしばらく前までのテープへの熱中にもかかわらず、息子は実物の野鳥の声にまったく関心をはらわなかったのである。プリズムのついたレンズで矯正してもなお眼に異常の残る息子にとって、こまかな網模様の枝から枝へ素早く移動する小鳥をとらえることは、まず無理だ。しかし小鳥は庭木にとどまって啼き声をあげもするのである。

朝早く、シジュウカラの数羽の群がせわしなく移って来、また通り雨のように過ぎさるのを見た。翌朝も同じことが繰りかえされたので、不審な思いにとらえられ、数日たってからだが、まだ露も乾かぬ朝の庭にシジュウカラの先廻りをしてみた。そして数は多いが貧弱な雑木にまといつき、あるいはぶらさがるこまかな青虫のおびただしさにおどろいたのである。さらに妻が小鳥たちの餌をつねに補給する、ということもあったのだった。

そのようにして日ましに増えてくる小鳥たちはしきりに啼いたが、息子はいつまでも興味を動かされるふうがなかった。

――イーヨーがテープで覚えた野鳥と、このあたりの野鳥の啼き声とでは、ピッチがちがうの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com